

二一世紀の未来社会

— 世界的複合危機、混迷の時代を生きる —

問い続ける

確かな明日の兆しを求めて

一九世紀未来社会論のアウトフヘーベン

止揚・熟成：そして根源からの大転換

「菜園家族」基調のCFP複合社会を経て

人間復活の高次自然社会へ

世界に誇る日本国憲法具現化の究極の道

小貫 雅男
伊藤 恵子

プロローグ

気候変動、新型コロナウイルス・パンデミック、そしてウクライナ戦争と、めまぐるしく同時多発する惨禍。この世界的複合危機、混迷の時代にあつて、世論はますます近視眼的で狭隘な視野に陥っていく。今一旦、時間と空間を広げ、少なくとも冷戦後の歴史に視座を据え、まずは今日の時代状況とその性格を確認しておく必要があるのではないか。

国民の戦争と平和に対する考え方が急速に後退する中、この機に乗じて、新聞・テレビなどマスメディアに次々に登場する「軍事専門家」と称する評論家のゲーム感覚まがいの生命軽視、生命侮辱とも言える「戦争俗論」が横行、罷り通る今、わが身を見つめ直すためにも、一九世紀ロシア文学を代表する文豪トルストイが『イワンのばか』（二八八五年）に込めた人間と社会への深い思想、そして『俘虜記』（一九四八年）の作家大岡昇平が自らの実体験から深めた現代戦争と人間への透徹した思索に今一度立ち返って、考えてみることに大切ではないだろうか。

冒頭にしては少し長くなるが、以下の三つの項目に沿って話を進めたいと思う。

混迷の二一世紀世界

一九九〇年代初頭、ソ連社会主義体制の崩壊を境に、第二次大戦後の世界を規定してきた米ソ二大陣営の対立による冷戦構造が消滅し、アメリカ単独覇権体制が成立することになる。しかしそれも束の間、アメリカ超大国の相対的衰退傾向の中、その弛緩に乗ずるかのようには、西欧諸国、ロシアといった旧来の伝統的大

国に加え、中国など新興大国が入り乱れる地球規模での新たな多元的覇権争奪の時代が幕を開けた。今や世界は憎しみと暴力の坩堝くわくと化し、報復の連鎖はとどまることを知らない。

資本は今なお飽くなき自己増殖を繰り返しながら、新たな市場を求めて世界を蚕食し、ますます巨大化への道を突き進んでいる。

二〇世紀七〇年代に入ると、資本の古典的とも言うべき増殖手法は、利殖家にとつては甚だ迂遠で非効率のと看做され、IT先端技術の発達とも相俟って、手っ取り早くしかも瞬時に、マネーが巨額のマネーを生み出す新たな回路が考案・開発されていく。そして今日、いよいよ人間を大地から引き離し、虚構と欺瞞、人間欲望の極限の世界にとことん追い遣る「経済の金融化」とも言うべき新たな恐るべき時代に突入したのである。

こうして巨万の富を加速的に蓄積した現代寡頭巨大金融資本は、世界を席捲し、これまでには見られなかった規模で実体経済を攪乱する。やがて世界の圧倒的多数を占める民衆の生活基盤、つまり人間にとつて根源的とも言うべき「家族」と「地域」、暮らして労働の場を根こそぎ破壊していく。この社会の不条理に民衆の不満と怒りは募り、紛争の火種となつて世界各地に拡散していく。決死の覚悟で蜂起した民衆の局地的紛争と戦争は、今や同時多発的に世界各地に頻発し、常態化する。

超大国はむやみやたらに戦争の危機を煽り、不都合な国や集団に対しては敵意をあらわにする。「仲間」と看做す国と徒党を組み、経済制裁だ、はたまた武力制裁だなどと言つて懲らしめる。

しかし、どんなにもつともらしく大義名分を並べ立てようと、その言葉の背後には巨大世界市場、そして石油・天然ガスなど化石燃料・鉱物資源などをめぐる欲望と利権が渦巻いている。「自由と民主主義の価値観を共有する」と言われているどの国も、またそうでないとされている国も、その支配層はいずれもこうした欲望と利権の化身そのものなのだ。

だから、国際紛争は解決されるどころか深い泥沼に陥り、戦争は長期化する。このままでは紛争と戦争は絶えることがない。世界は今や各地に紛争の火種が播き散らされ、世界大戦への一触即発の危険に晒されている。

こうした火種は鎮まるどころか、ますます勢いを増し、同時多発の様相すら呈し、慢性化していく。このことは、一九七〇年代に端を発した経済の極端な金融化、さらには一九九〇年代初頭のソ連崩壊によつて旧社会主義諸国をも巻き込む市場原理至上主義の新自由主義的経済が生み出した極端な貧富の格差が、全世界に加速的に拡大していることと決して無縁ではない。人々の不満や怒りは頂点に達し、それが際立った負の現象として表面に露呈したものと見るべきであろう。いよいよ資本主義は行き詰まり、末期的症状をいつそあらわにしている。

為政者は自らの社会の深層に潜む根源的な原因には目を伏せ、民衆の不満を外にそらそうとする。絶えず国外に仮想敵をつくり、大国自身がつくり出した紛争に性懲りもなく関与していく。その内実は、相変わらず「仲間」なるものと徒党を組み、経済封鎖だの、武力行使、はたまたあからさまに「敵基地攻撃」だのと、他者に壊滅的な打撃を与えること、つまり「暴力」によつて対処しようとする実に浅はかな愚行なのだ。もはやそれ以外にすすべを知らない。混乱はますます深まり、紛争は激化する。それをまた口実に、民衆の血税はとことん吸い上げられ、科学技術の粋を尽くした最新鋭の軍備が増強される。際限なき暴力の連鎖。このどうしようもない現実こそが、資本主義が陥つた末期的事態ではないのか。

まさにこうした中、新型コロナウイルスはあたかも意志あるかのように嘲笑い、人間どもの隙を突いて襲いかかってきた。グローバル化と都市の巨大化・過密化が進む今、ウイルスは瞬く間に地球規模に拡散。パндеミックの猛威は、世界を一気に震撼させた。私たちの社会はいかにも脆弱であり、その根源的矛盾の罠にあつさり取り籠められ、一步も身動きできない事態に一瞬のうちに陥ってしまった。巨大都市集中の歪

な国土構造、国内産業を空洞化させ、グローバルなサプライチェーンに依存する生産体系。今さらのように、その弊害の恐ろしさに気づかされた。この際、ごまかすことなく、わが身を振り返り、明日の社会のありようそのものをいよいよ真剣に考えなければならぬ時に来ている。

新型コロナウイルスの問題も、気候変動の問題も、自然と人間社会の生成・進化の長い歴史との切っても切れない宿命とも言える深い関わりの中で、回復不能なまでに生態系を蝕むほどの飽くなき欲望に基づく近年の人間の経済活動によって引き起こされたものである。一方のウイルスは、ヒトの細胞内に執拗に侵入・寄生し増殖するという経路の違いはあるが、両者とも自然界の深奥から発し人間一人ひとりに襲いかかり、ついには人間の活動や移動を抑え込み、究極において人間社会そのものをも根底から覆す点で大がかりであり、その大本をただせば、結局、新型コロナウイルスの問題も、気候変動の問題も、本質的には同一のことから由来しているのだ。同時に、地球温暖化による気候変動が感染症のリスクをさらに増大させるという連関性が科学者から指摘されている。しかもウイルスとヒトの進化の歴史は、時をはるか遠く遡れば、遺伝子レベルにおいて深く関わっていたとも言われており、生命進化の不可思議、人間とウイルスの因縁の深さをあらためて思い知らされるのである。

私たちは今、気候変動、パンデミック、ウクライナ戦争と、現実社会に次々と露わになってくる新たな事態をふまえ、これらの問題を個々別々にではなく、統一的、全体的ホリスティックなものとして捉え、この世界的複合危機を乗り越えて、どのような未来社会をめざしていくべきかを真剣に考える時に来ているのではないか。

『イワンのばか』直耕に込められたトルストイの深い思想

今から十二年前、ロシア文学研究者・法橋和彦氏の論考「没後百年を生きるトルストイの思想」(『日本とユーラシア』二〇一〇年十二月一五日号掲載、発行 日本ユーラシア協会)の中で取り上げられたトルストイの「イワ

ンの馬鹿」は、岩波文庫『トルストイ民話集 イワンのばか 他八篇』(中村白葉訳、一九三三年第一刷発行)の中に、「イワンのばかとそのふたりの兄弟」として収められている。

文庫本の表紙には、「ここに収められた(中略)民話には、愛すべきロシアの大地のにおいがする。そして民話の素朴な美しさの中に厳しい試練に耐えぬいたトルストイ(一八二八〜一九一〇)の思想の深みがのぞいている。ロマン・ロランが「芸術以上の芸術」「永遠なるもの」と絶賛し、作者自身全著作中もっとも重きをおいた作品。」と紹介されている。

そして、巻末の解説の中で、訳者中村白葉氏は、『イワンのばか』は、一面においてロシア人の底抜けの善意と大きさ、愚直さの象徴であり憧憬であると同時に、トルストイその人の底抜けの正直さ、大きさ、善意の象徴であり憧憬でもある。国民としても、個人としても、私は、イワンのばかの要素を尊いとも大切とも考える。小りこう性の多いわれら日本人にはとくに、ロシア人のようにいま少しこの要素がほしいと思うのは、はたして私だけだろうか。」と遠慮深く付け加えている。

反ロシア、反中国、反北朝鮮、嫌韓・：キャンペーンの中で、偏狭な民族蔑視がますます助長されている今日の状況下にあつて、この指摘は、いよいよ大切になってきている。

ところで、「イワンのばかとそのふたりの兄弟」は、副題にある通り、軍人の長男セミヨンと、ほてい腹の商人・次男タラスと、唾の妹マラーニヤと、老悪魔と、三人の小悪魔の主要登場人物たちの織り成す物語である。

長男の軍人セミヨンには、戦争に対する批判的態度が具象化されているし、ほていのタラスは、資本主義的人格の典型であり、両親のあとを継いだ三男イワンは、手にたこをつくり、正直に働く直耕のお人好しのロシア農民の典型であり、唾の妹マラーニヤは、世間からは何一つできないと蔑まれながらも、兄のイワンを手伝い、健気に生きる農民女性を形象化している。

妹のマラーニヤは作中あまり登場してこないのであるが、村びとの中に溶け込み、ひたむきに働く。その一つひとつの所作や一途な姿が、不思議に憂いをおびた幽かな基底音となって、いつまでも読む人の心の奥底に響いてくる。トルストイがこの女性をそつと作中の片隅に設定したのは、偶然ではなく、必然と言うほかない。

訳者の中村氏が指摘しているように、この作品には、特権階級の寄生性に対する永遠の摘発、人生観、道徳観、汎労働主義もあれば、非武装・無抵抗主義もあり、商品・貨幣経済への告発もあれば、反戦の思想もあり、徹底的な人間平等の思想も貫かれている。

それは、自然観と社会観を統一的に捉え、人間社会の階級性を断罪した点で、わが国における近世江戸中期の安藤昌益(一七〇三―一七六二)^{※1}の思想に通底するものがある。

「イワンのばか」は、本当の「馬鹿」であったのであるうか。イワンが世間の常識からは突き抜けて、まったく異なる次元の価値観、世界観、社会観、人生観に立脚していたが故に、他人から無理難題を頼まれても、お人好しに、おおらかに「ああ、いいとも！」と受け入れる。この言葉は、六〇ページ足らずのこの短編の中に、繰り返し何度も出てくる。世間の人からすれば、驚くべき「馬鹿」に映るのも無理もない。

やがて時が経ち誕生した「イワンのばかの国」からは、賢い人はみんな出て行ってしまい、ただ、ばかだけがあとに残り、噂を聞いて、外からばかたちが移住してきた。誰もがお金というものを持たず、働いて自ら養った。

タラカン王(油虫王の意)は、大きな軍隊を集め、鉄砲や大砲を用意し、兵力を増強して国境近くに集結させ、イワン王国へ侵攻した。

武器もない、兵隊もない「イワンのばかの国」は、果たしてどうなったのか。この王国に侵攻した軍隊は、勇んでみても戦う相手がどこにもおらず、「まるでゼリーでも切るような」手応えのなさに呆気にとら

れ、戦意を失って雲散霧消し、ほどなくこの「ばかの国」に飲み込まれてしまうのである。

この描写に込められたトルストイの深い思想は、ぜひとも作品そのものをじっくり読んで味わい、汲み取っていただきたい。

今こそ民衆の創意と連帯による二一世紀の未来社会を

さて、二一世紀の今日引き起こされたウクライナ戦争は、二〇二二年二月二四日のロシアの軍事侵攻開始から七カ月以上が過ぎた今も、停戦の目途すら立っていない。ウクライナのゼレンスキー大統領の要請によるNATO(北大西洋条約機構)、欧米諸国からの武器供与は、かえってプーチン政権をしてロシア軍のいつもの兵力増強と攻撃激化へと駆り立てている。ウクライナ国土を戦場に双方の莫大な火力が投下され、民間人を含む人命の殺傷と市街の破壊にいよいよ拍車をかけていく。

欧米諸国がロシアへの経済制裁と軍事攻勢を強めれば強めるほど、プーチン政権・ロシア軍部を生物・化学兵器、核兵器の使用へとエスカレートさせ、勝者も敗者もない人類破滅の第三次世界大戦へと暴発させかねない。これが極悪非道のプーチン断罪をひたすら掲げ、「ウクライナ支援」と称してやっていることの真相であり、本質である。

連日連夜、世界の人々は、新聞やテレビを通じて、ロシア軍によるウクライナ侵攻のニュースを悲痛な思いで目にし、耳にしている。攻撃を受け、死傷者が続出し、家族が分断され、老人や子供たちが逃げ惑い、生き地獄の中で不安と恐怖に怯えている。一民衆に過ぎないロシア兵の側にも多くの死傷者が出て、母親や家族・友人たちが泣いている。かつてのソ連邦の同胞であり、昨日までの隣人同士が、憎しみ合い、傷つけ合い、殺し合っている。

解決のために各国首脳が表向き派手に国際会議を演出するものの、まったく進展が見られない。一刻の先

延ばしの猶予も許されない、凄惨な光景を目の前にしながら、一体なぜなのか。それは、各国首脳の本当の眼目、これ以上、犠牲者を一人でも増やしてはならないという、人命最優先の本来あるべき一点にあるのではなく、結局その背後には、覇権抗争を如何に自らに有利に展開させるかという、アメリカはじめ超大国、そしてそれを取り巻く諸大国支配層それぞれの思惑が働いているからだ。

この膠着状態を今こそ一刻も早く打開しなければならぬ。世界各国の民衆が非同盟・中立、非武装・不戦、そして権力不服従の精神を貫き、自ら進んで武器を捨て、自国政府に向かって武器供与と売買、軍事支援を即刻中止させ、このうねりを世界の隅々にまで広げていくのである。各国政府の首脳に頼っている、この何とも言いようのない無気味な膠着状態から抜け出すことができないばかりか、全面的な核世界大戦にすら発展しかねない。

一旦、戦争が始まると、戦争指導者のみならず、兵士、そして一般市民ですら理性と倫理性を無残にも破壊され、特に戦場の兵士は野獣と化し、蛮行に走る。これが昔も今も変わらぬ戦争の本質である。ウクライナの国民が今もとも望んでいることは、民衆同士の殺し合いではない。超大国覇権抗争の犠牲とも言うべきこの生き地獄からの脱出であり、元の暮らしに一日も早く戻ることはないのか。

ウクライナの民衆は、何よりもまず国民の生命と暮らしを守らなければならない責任を負っているはずのゼレンスキー大統領と自らの政府に、この切実な真実の声を率直に伝え、NATOや欧米諸国に対して戦闘機やミサイル防衛システムなど最新最強の武器援助を乞い願う道ではなく、即時停戦の決断を迫ることはないのか。

同時に、言論・思想統制・弾圧の厳しい条件下にあるロシアの民衆も、この戦争の構図と本質を見据え、何とか心を合わせ勇気を持って、自らの政府に即時侵攻中止を求める時に来ている。

偉大なる思想家トルストイを輩出したロシアの雄大な大地で、歴史的苦悩と常に格闘し続けてきたロシア

の民衆も、そしてまた、同じ風土、文化、歴史を共有してきたはらからウクライナの民衆も、非武装・不戦の同じこの思いに立った時、憎しみを越え、相互尊重と国境なき民衆連帯の上に、新たな未来へと歩み出すことができるのではないか。

第二次世界大戦後今日に至るまで、米国は、価値観が異なり従わない国に対しては、同盟による軍事プロックを構築し、経済封鎖と武力によって圧力をかけ、超大国の覇権主義的国際秩序を維持してきた。朝鮮民族の南北分断とその後の朝鮮戦争、そしてベトナム戦争、アフガニスタン戦争、イラク戦争等々を想起するだけでも、その罪の重さと大きさには領けるはずだ。これが米国をはじめヨーロッパ諸国、そして日本の為政者が口を揃えて盛んに言う「自由と民主主義の普遍的価値に基づく国際秩序」の実態なのである。

長きにわたって続いてきたこの米国単独覇権主義体制は、綻びを見せはじめ、短期的には浮き沈みはあるにしても、ウクライナ戦争を契機に、いざれその破綻の道は決定的な段階を迎えるにちがいない。

わが国の作家大岡昇平（一九〇九～一九八八）は、アジア・太平洋戦争における自らの実体験から、戦争とは何か、人間の容赦なき破壊とその残虐性、そして国籍、民族の別なく現出するその本質の普遍性を文学作品に見事に昇華。二一世紀の今日の私たちに、戦争は絶対悪であることを切々と訴えかけてくる。

私たち日本の国民は、世界に誇る非同盟・中立、非武装・不戦の日本国憲法前文と第九条を持っている。時代の常識からはまったく異なる次元に立つ人生観、価値観、世界観であるが故に、たとえ「ばかの国」と言われようが、世の同調圧力に屈することなく、ウクライナ戦争のさなかにある今こそ、日本国民自らが施行七五年を迎えた日本国憲法の前文および第九条の精神を堅持し、日米軍事同盟を排し、永世中立を貫くこと、そして自らの国土に非戦・平和の確かな礎となる自然循環型共生の新たな社会を築き、世界に先駆けて民衆の範となることを再び決意することである。

いよいよ緊急を要する課題となった各国での核兵器・軍備廃絶運動も、非戦・平和の運動も、本書で提起

する「生命系の未来社会論」具現化の道、すなわち「菜園家族」社会構想^{※2}の大地に根ざした二一世紀のライフスタイルの創造という新たな動きと連動することによってはじめて、単なる抽象レベルでの反対にとどまることなく、一步踏み込んで生活の内実の変革と結合した多彩で豊かな民衆運動へと発展していくことが可能になるのではないか。そこにこそ、近代を超越する「菜園家族的平和主義」^{※3}の真骨頂がある。

こうしてはじめて、日本国憲法第九条の「戦争の放棄、戦力の不保持、交戦権の否認」の精神は、遠い未来の理念としてではなく、国民生活から切り離すことのできないものとして暮らしの中に深く溶け込み、私たち一人ひとりのまさに血肉となっていく。

それは、一八八五年、トルストイが「イワンのばか」で描いた、ロシア農民の直耕の暮らしに裏打ちされた、おおらかで素朴な人間性と人々の共生こそが、揺るがぬ平和の基盤を足もとから築いていくというあの深い思想を、二一世紀の今に思い起こし、現代の私たち自身の社会に、単なる表面上の模倣ではなく、その真髓をまさに創造的に生かすことではないか。

ウクライナ即時停戦から終結へ、そしてその後の復興の長い苦難の道のりを本当に支援できるのは、私たち自身の社会が変わり、私たち自身が生まれ変わる時である。これが私たちにできるウクライナとロシアの民衆へのまことの連帯であり、本物の支援なのである。

戦争がひとたびはじまった以上、どちらが先に仕掛けたのか、どちらが侵略したのか問うている場合ではないのだ。現にますます激しくなっていく殺戮と破壊を目の前にしながら、ゲーム感覚で平然と解説する軍事評論家、それを無批判に四六時中、垂れ流すマスメディア。一刻も早く戦争を中止しなければならぬ。背後で武器を提供し戦争中止を阻む者、ましてや戦争を推進する者、その片棒を担ぐ者は、どんな理由があろうとも、すべて等しく世界の民衆の名において必ずや糾弾されるであろう。

超大国、そして諸々の大国の
権力者たちよ

ウクライナ戦争をいつまで続ければ
気が済むと言うのであろうか

この機に乗じて

敵が攻めてきたら

どうするのかと

恐怖を煽り、敵愾心を駆り立て

ずる賢く軍拡を目論む

まことに「民主的」に選ばれ

バッジをつけ

背広を着込んだ

何ともごさかしい

人間どもよ

民衆同士の殺し合いは

もう、まっぴらごめんだ

世界をつなぐ

国境なき民衆連帯と

小さき者たちの

英知の力で

たとえどんなに時間がかかろうとも
戦争なき明日の世界を築いていくのだ

今こそ響き渡れ

夜明けの歌よ

※1 本書の第十二章2節の項目「自然観と社会観の分離を排し、両者合一の思想を社会変革のすべての基礎におく」で

詳述。

※2 本書の第六章「あらためて考える二一世紀の未来社会——自然界の生命進化の奥深い秩序に連動し、展開——」で詳述。

※3 本書の第十一章「『菜園家族的平和主義』の構築——いのちの思想を現実の世界へ——」で詳述。

☆引用・参考文献☆

アルフレッド・W・クロスビー著、西村秀一訳・解説『史上最悪のインフルエンザ——忘れられたパンデミック——』みすず書房、二〇〇四年

山本太郎『感染症と文明——共生への道』岩波新書、二〇一一年

山内一也『ウイルスの意味論——生命の定義を超えた存在——』みすず書房、二〇一八年

山内一也『ウイルスの世紀——なぜ繰り返して出現するのか——』みすず書房、二〇二〇年

トルストイ著、中村白葉訳『トルストイ民話集 イワンのばか 他八篇』岩波文庫、一九三二年第一刷発行

大岡昇平『俘虜記』新潮文庫、一九六七年（初版は創元社、一九四八年）